

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授受認可第三五二號
昭和二十四年十月廿日印刷 昭和二十四年十一月一日發行

第十五卷

第十一號

浄土

十一月號

新秋三昧

吉田絃二郎

父と私と佛教

J・プリンクリー

法然上人法語

眞野正順

彼岸の世界

藤井實應

平和宗教

宗教は神話から發達したと一般の學者は考えている。この考
えに立つ、學者は神話があとから附着した佛教を見て困つてい
る。宗教は神話的色彩を完全には抜ききれぬものであると云ふ
考へも怪しくなつた。神話は民族性のものである。従つて神話
から完全にぬけきらぬ宗教は完全な世界教ではない。一民族の
文化を以て他民族の文化を征服して始めて廣められるもので、
この意味で神話から抜けない宗教は侵略宗教である。

印度に出て印度では亡びた佛教は教義の行き方が寛大すぎる
からだと學者から批評された。他國に入つても眞の佛教は決し
て猛威をふるわなかつた。その國の宗教をとり入れそれらしく
なつたり、或は前からある宗教を深め、高尚なものとしてこれ
に佛教的生命を吹きこんで來た。これほど温い平和な世界教は
他にあらうか。この佛教の態度は何に歸するのだらうか。佛教
が人生共通の矛盾を、徹底的につきつめて更にこれを除去して
出來上つた宗教だからだと思ふ。人生の共通點に立つだけ如何
なる民族にも個人にも適合するのである。宗教も人格と同様に
その後天的よりは先天的素質に依るところが大きい。

(松濤誠籙)

目次

法然上人法語(二).....	眞野正順(20)
山寺・落日(詩).....	鳥居良禪(17)
木曾路の秋(句).....	關口曇華(3)
佛畫をみる心.....	佐藤密雄(11)
父と私と佛教.....	J・プリンクリー(4)
新秋三昧.....	吉田絃二郎(1)
襟を美しく.....	早見君子(16)
温いでせう.....	合田微雪(14)
孔雀の話.....	素人(18)
彼岸の世界.....	藤井實應(8)

會友の聲・芝園だより



新 秋 三 味

吉 田 絃 二 郎

けふはわが佛の忌日であつた。一週間ばかりかりそめの病に臥せつてゐたが、昨日から熱もとれたやうなので、床を上げることにした。

一週間ぶりで、冷たい井戸の水で顔を洗ひながら、不圖空を仰ぐと、海のやうな初秋の空に反映して柚子の實が大きくなつてゐるのに、今さらのやうに驚く。

少しよろめく足を氣づかひながら、家のまはりを歩いて見る。茶の花がつゝましく咲きはじめてゐるのを見てまた驚く。まことに季節の移りかはりの早く、確實なことを想ふ。

庭の芙蓉、萩、水引、のしめらん、うめもどき、芒、山茶花、それぞれのあはれをこめてゐる。

(1)
空の色も雲のたゞすみひも風のこゑも近づいて來る落漠の秋をさゝやいてゐる。

I 君が佛の供花にと、菊の花を携へて見えた。大輪の黄、紅の菊である。I 君は月々の佛の忌日を忘れず、この十餘年の間花を手向けてくれる。

けさ手向けの菊の花を見て、さらに秋に生きる身のありがたさを感じるのであつた。

年々再々同じ秋ではあるが、秋になれば殊に深く、生きてあることのありがたさを感じる。

年中、病みつゞけてゐ、起居にも他人の手を煩はさねばならぬやうな天涯孤獨の身には、時として生きることのわびしさを感じることもないではない。良寛さまの「雨のふる日はあはれなり良寛坊」といふ短い言葉にはいろいろの意味が掬み取られる。簡単に片付けてしまへばそれまでのことであるが、國上山五合庵に獨居幽棲の老僧の身の上を、靜かに考へて見ると、「あはれなり良寛坊」

の言葉の中には高僧らしい悟りもあるが、凡愚の持つ愚痴もある。

すべて世の中のことは自分の経験しないことは理解できるものではない。「つれづれ」には友人として持つべからざるものゝ一つに、からだの健かな人を舉げてある。肉體の丈夫な人は病を持つてゐる人の苦痛を知らない。そのために弱い人に對するまことの同情を持ち得ない。若いころは老人のかたくなとばかり思つてゐたことが自分がその年になつてはじめて、理解できることが多い。

大正の五六年のころであつたらうか。歌舞伎座で左團次の富樫、歌右衛門の義經、幸四郎の辨慶といふやうな顔振れで勸進帳が上演されたことがあつた。入場券を買ふのにも一苦勞であつた。妻とわたくしは一桮買つて或る老人を招待した。老人はなか／＼姿を見せなかつた。わたくしたちは氣が氣でなく幾度も歌舞伎座の玄關に立つて老人を待つたが、老人は芝居のはねるまでたうとう姿を見せなかつた。わたくしたちはちよつと暗い氣持ち

になつた。

老人は何故勸進帳を見に來なかつたか？

このごろになり、わたくし自身がその老人の年配になり、はじめて、その老人の氣持ちがわかるやうな氣がする。その老人は若いころ田之助を見てゐたし、團十郎はじめ五代目菊五郎左團次の芝居もほとんど缺かさず觀てゐた。そして大正年代になれば老人は視力も衰へ、歩行も自由ではなかつたであらう。その老人にとつては若い俳優たちの勸進帳では物足りなかつたであらうし、それに肉體の不自由さを考へて見ると、老人にとつては芝居の招待は迷惑なことであつたにちがひない。わたくしも芝居は好きであり、根岸に住んでゐたので、市村、明治、新富、歌舞伎、帝劇、本郷座と毎月一と廻りは見てまはつたものである。本郷座に左團次の大さかづきがかつた時などは、一芝居に三度觀に行つたくらゐる芝居は好きであつたが、このころはからだが不自由になり、年にたゞ一度も出かけないやうなことになる。芝居は見たいが、人ごみの中がいやなのである。たゞ獨り、家にもりゐて小鳥の聲を聴くなり、雨の音を聴いたりする方が楽しみとなつてしまつた。

良寛さまがすべての人に親しまれるのは、高僧めいたところがなく、七十になつても子供らしく、凡愚らしく暮して行かれたためであらう。

世のなかにましらぬとはあらねども

ひとりあそびぞわれはまされる

五合庵にこもつてたゞひとり萬葉を読み、歌を案じ、手毬をつき、おはぢきを楽しんでゐたであらう老僧の姿は想像するだけでも、人のこゝろを明かるくする。

そこには枯れ切つた悟りがあるやうで、實は枯れ切つた悟りはない。山にこもり、人里からはなれてゐても、斷つことのできない凡愚のなやみはあつた。出雲崎の生家の家運のこと、甥が放蕩のこと、良寛さまにも人並のなやみもあり、人以上の心のわづらひもあつた。

甥の放蕩を意見する役目を依頼され、國上山の五合庵を出て、出雲崎の生家橘屋へ行つた良寛さまは、その日は何も甥には話さない。二晩泊つたが一言も意見めいたことは言はない。三日目の朝、いよいよ五合庵に歸る時玄關に腰かけて草鞋を甥に穿かせてもらつた。草鞋の紐を結んでゐる甥の手の甲に溫いものが落ちて來た。甥はふしぎに思つて顔をあげて見た。良寛さまの眼には涙が

あふれてゐた。良寛さまは、そのまゝ何も言はず五合庵にかへつて行つた。

五合庵にこもつて楽しさうに手毬をついてゐる良寛さまの「雨のふる日はあはれなり良寛坊」の意味を實感することのできるのも老いといふものゝ賜物である。

山の初雪のたよりがしきりに傳へられる。長い冬ごもりのことを想ふと寂しいが、山の初雪と聞けばいひやうもないなつかしいものがある。庭に來鳴くひたきの聲を聴きながら、山の新雪を想ふ時、一切の俗念は拂拭される秋に生きることもありがたく、冬に生きることもありがたい。

木曾路の秋

關口曇華

秋の田の美濃越え稻架はぎの木曾路かな

木曾路はや漆もみちの濃かりける

鈴なりの柿また柿の木曾路かな

夕暮るゝ木曾路の秋や屋根の石

父と私と佛教

ジョン・プリンクリー

私が東洋的なものを好み、特に佛教を信するようになったのに就ては、もとより私一個の獨自な生活體驗から來てゐるのでして、それ以外に特にこれを取り立てゝ言うほどの特定の指導とか感化によるといふことはないのです。しかし少なくとも最初にかような生活環境に私をおいてくれたのは、私の父であり——今日ではもはや父を知る人もだん／＼少なくなつて來ては居りますが——父は私に劣らずというか、むしろ私以上に東洋、特に日本をふかく愛し、ひろく研究もして、少なからず日本に關する著書も残しているといふ事實から見ると、私の今日あるについては、父の性格と體驗とが全然無關係だとは申せません。佛教で言う、いわゆる淺からぬ因縁がつながつてゐることは否定できないことです。

そういつた立場から、私自身に直接間接に影響をあたえ

たと思われる父と日本との接觸面を、幼時に父から聞いた斷片的な想い出話をつゞり合わせながら少しくお話してみましよう。

父がそも／＼最初に日本に參りましたのは一八六五年、日本流にして慶應元年、即ち今からではもう八十五年も前になります。當時、香港總督マクドナルド氏の副官をつとめて居りました父は、その頃上海の總領事をしていたパークスが駐日公使に任ぜられて日本へ赴任することに成つたので、元來親戚の間柄であつた關係から父は、誘われるまゝに見學かたがた日本に來る機會を得たのです。このときは數週間滞在しただけで、また香港に歸つたのですが、後にお話するように父は當時日本については最初から特別な印象をうけ、よほど興味をひかれたと見えまして、更にその翌々年即ち慶應三年に公使館付武官として再び日本に

來たのであります。この年の十一月には徳川幕府が政權から去つて明治の新政府の出發が始まろうという、近代日本の大きな變動の時で、父は實にそうした日本の烈しい動きのところへ赴任して來たわけですから、その印象も随分ふかいものがあつたのではないかと思ひます。そしてその後、實に三十年に及ぶ日本との深い縁が結ばれたのです。

さて父の日本印象記なのですが、はじめて日本に來ましたときは、僅かな滞在期間で長崎に居りました。ところで當時長崎に在住の英國人たちが、一夕歡迎の宴を開いてくれました。その宴が終つて船に歸る途中、父は全く思ひがけない場面に出合つたのです。もちろん偶然のことですが、海彼岸の人の眼を驚かしたことでせうし、また之が日本人の心情といつたものに、深い關心を惹かせることにもなつたのです。

(5)
それは何が原因だかは勿論分りませんが、とある街角のところで、二人の武士が白刃を交へて果し合ひをしているのでした。衆人環視の中での生死をかけたこの決闘場面に通り合せて陸軍武官の父は、足をとめて見ていました。傷を負つた一方が道に倒れたそうです。瞬間一方は白刃を倒れた相手に打ちおろすかと、ハツと息を呑む思ひをしたと

ころ彼はしづかに片手に白刃を構へながらも、倒れた相手を見守つていました。やがて傷いた武士は再び立ち上ると猛然と最後の力を振つて相手に迫つて行きましたが、遂に更に深傷を受けて倒れその儘になつてしまひました。武士は今迄生命をかけて戦つていた相手の死をたしかめると、刀を拭つて鞘に納めやがて相手を道の一角に抱き運び、衣服の亂れも整えてしづかに合掌し瞑目していましたが、悠々と立ち去つたそうです。

この光景をみた父は、そこで思はずホツとした想ひで、歸りを急いだそうですが、父の腦裡にはこの武士の行動がつよく印象されました。日本人を理解しよう、日本を知ろうとする父の氣持は、この偶然であつた場面から始まり、それがまた日本人の生活心情の中に流れている佛教への關心ともなつて行つたものと思ひます。

敵をこの場合どちらかゞ倒すことは、豫想されたことです。しかし白刃の下で相對した、いはゞ仇同士はこの武士が、最後に倒れた相手に向つてとつた態度、死者に對する態度——もちろんその時の父は、武士道といつた武士間の道徳を知つてはいなかつたのですが、——その中に何か見逃すことの出来ない人間の深奥の姿を感じたのです。當時の日

本は外國人にとつて決して安全ではありませんでした。何か物騒なその社會を、しかも全く奇異な生活風習の日本を、頭から未開とか野蠻と考え切れないものに、父は心の中でぶつかつたということです。

父は日本を、日本人をその心の深いところで理解しはじめてゆきました。

のちに父はこのことの一部始終を、パークス公使に物語つて「日本人は東洋人ではあるが、一般東洋人に對するとは別種の考慮を、外交に當つても、またその他公私の接觸の上にも、拂ふ必要があろう。」と、言ひ添えたそうであります。パークスは日本の政府との交渉に當つては、その態度は倨傲であつたように、日本側では多く印象しているようですが、パークスはたしかにアーネスト・サトウも言っているように、「人一倍の豪勇を以て死に直面したことがある」といふので聞え、極東に於ける歐洲の全居留民の眼にさえ、極東諸國に來ている英國のどの官吏よりも高い地位にあるかの如く映じた。」のですから、當時の日本の政府關係者にパークス公使が剛腹の人物とみられたことは當然のことです。しかし日本が、公使の當時の努力に對して受けた恩惠について充分に認識していない點があるとも思われま

す。公使は實は非常に親日家で、日本人と歐米人との友交機關である東京クラブを創設したのも彼で、それは一に兩者の交際をこまやかにして理解を深めてゆきたいということにあつたことは申すまでもありません。

父は前に申したように、慶應三年には公使館付武官として再び日本に來ましたが、この時は下關に上陸して、騎馬で江戸まで旅行したそうです。まだ各大名の封藩の形が存續していた時ですから、一の藩地から次の藩領へ入るときには、兩藩のいはゞ「國境驛」に至るごとに、兩藩から差し向けられた護衛の武士隊の間に、事務の引繼ぎが行なわれ、それがまた實に煩雜な手続きであつたようで、父の一行は之には閉口したこともあつたようです。しかしそうした間にも、彼等武士が事を處するに當つて克明であり、良心的であることには心中大いに注目されたそうです。父は一體佛教をどういう風に見て居つたか―その心境については遂に生前にこれを詳かに聞く機會を得なかつたのですが、私が佛教に對してふかい關心をよせはじめてから改めて考えてみますと、父も相當つよい關心を佛教には寄せて居つたことを知つたのであります。それについて次の様な話があります。

後年、私がロンドンで勉學中のこと、英國大菩提協會のダンマパーダ氏を訪れたことがありました。その時、案内のボーイが「ミスター・プリンクリー」と言つて取次ぐとともに私は師の部屋に入つたのですが、室はうすくらく、殊に入口からの光線を背にしていたので私の顔はよくは師の方からは見えない筈であるのに、師は即座に「ウェルカム、ミスタープリンクリー、フロム、ジャパン」(ようこそ日本からのプリンクリーさん)と言いました。誰からも何も聞かず、たゞ案内のボーイが名前を取次いだゞけなのに父のプリンクリーと日本をむすびつけたかというには、こんな事情があるのです。

それはダンマパーダ師は、當時あの有名な靈智會の會長であるオルコット大佐の祕書として日本を訪問して、私の父と會つたことがあるのです。オルコット大佐は英本國に居るところから、私の父が社長兼主筆として主宰してしましたジャパンメール紙で、父の書く文章を讀んで父のことを記憶して居りましたので、日本訪問の機會に、先づ父を訪ね、その紹介で伊藤博文をはじめ、時の朝野の名士と相知るに至り、また佛教會の代表的な人たちにも父を通して交るに至つたのです。

こんな次第で、プリンクリーの名を聞くと、師の念頭にはオルコット大佐の祕書として訪ねた日本、その日本で種々と奔走した私の父のことが何はにおいても浮び上つたのだとおもひます。因みにダンマパーダ師は印度のセイロンに生れ、はじめは佛教徒ではなかつたのですが、生來非常に眞面目な性質で、「この一生を如何様にして人生のために盡すべきか」といつたことに平素も思ひをひそめて居られました。或るとき靈智會の創始者であるマダム・ブラバツキーと、そのことについていろ／＼語り合つたときに、夫人から「それには佛教の世界觀、人生觀を明らかにした上で決せられるのが一番よく、佛教を知るにはパーリ語の經典によつて充分に佛教を學ぶことがよい」との意見を聞かされ、それから佛教研究に入つて、遂に悟道に達し、後には自ら大菩提協會の會長となつてこの道のために盡されたのですが、またその因縁によつて、靈智會長オルコット大佐の祕書もつとめられたのです。

父プリンクリーと佛教との關聯についての斷片的な想ひ出—それについてまた次の機會にお話してみませう。

彼岸の世界

藤井實應

(一)

終戦後はじめて山形秋田青森宮城等東北有縁の地を巡講いたしました。事變以來は同信同行の方々とも久しくあうこともできませんでしたが、時勢のととのうてきたおかげで、數年ぶり、十數年ぶりになつかしい方々とお目にかかることができました。久しぶりにあうたその時には、お互に年をとつたものだとし「ずいぶん白髪がふえたね」「さういふ君こそ……」などと、しばらく話していると、むかしのままの面影が出てきて、話がはずむのでした。事變や戦争でたくさんの人々が死んでゆかれた中に、われら不思議に助けられて、こうしてお目にかかることは、そのことがすでに有難いことと思はれるのでした。そして誰々さんは戦死せられた、誰々さんは病氣で亡くなられた、あの元氣な誰々さんなどと、次々になつかしき同信の方々のなくなられた話が出るのでした。なつかしき故人のおもかげを偲びつつ、人間は(私は)死んでゆかねばならぬ身なることを、今更に深く反省せしめられました。

(二)

おもえば、私の母は三十年前に急病で死去し——それが動機の一となつて私は出家しま

平和を祈る

國民宗教大會

二萬の觀衆を入れるスタンド。その中央のフィールドには、純白に銀で地圖を描いた直徑十五尺程の地球儀が、秋雨の空ながら、圓天井一杯からさし込む光線に、純潔そのもののよう輝いている。この地球儀を中心に八つの壇がこれも白一色に塗られて横わつてゐる。開會前の一時間、既に會場の八分は人々で埋められ、玄關から式場への廊下には、教界、言論界、業界、地元等から贈られた大花環が數百と列をなして、人々を自然に式場の入口に歩ませる。大正大學の學生百名、千代田女子數十名の奉仕隊の人々がそれぞれの部署にあつて機敏にことを運んでゆく。

世界戦々歿者追悼、平和祈願、この二つの目的のもとに開かれた國民宗教大會は、十月六日、午前十時より、新装やうやくなつた東京、芝のスポーツセンターで催された。主催は日本宗教連盟と宗教懇話會、その他各教連合會、後援は朝日、讀賣、毎日の各新聞社と放送協會、これに加えて協賛は、日本赤十字社、國際宗教同志會連盟、世界平和佛教會、

した——父も事變中に私の弟の戦線に出ていることを氣にしつつ西去しました。二人の伯父も一昨年、昨年と次々に亡くなり、親しき友も、なつかしい先生も、まだ年若き教へ子も思ひ出します。私の子供も一人なくなっていることを思はずにはをれません。なくなりし人々の住める世界——死のかなたの世界——が一種のなつかしさを以てしたわしく思はれてきます。と申して私は死にたいと思ふのではありません、なくなれた多くの人々はただ死んでしまつたのではなく、肉體の死を越えた彼方の世界に生きてをられると感ぜられるのです。それなればこそしたわしく思はれるのでないでせうか。死んでも死なない世界、生き死にを越えた世界、——即ち生死超脱の彼岸の世界——その一つの世界にみな俱にすんでをられる、その世界がしたわしく思はれるのであります。

(三)

その世界はもはや損した得したなどの打算を離れ、譽められた、そしられたなどの名欲を離れた世界です、眞に生きる世界とも浄土とも名づけられる世界です。その世界がしたわれ、その世界に生きようと願ふているのでありますが、それはこの肉體が死んでからというのではなく、今日只今しつかり眞に生きることが大切だと教えられています。今日眞に生きるものこそ、肉體は死んでも、死の彼方の世界に永遠に生きると教へられています。安らかに死んでゆけるのも、生き死にを越えた世界が信ぜられているからではないでしょうか、そしてそれは眞に生きるとき安らかに死んでゆけるのであるといえるでしょう。やすらかに死んでゆける道はほんとうに生きゆくほかはありません。ほんとうに生きるとは、いつ死んでもよいだけの生き方であります、それは又いつまで生きていてもよいという生き方であります。利害や損得や毀譽や盛衰にとらわれないで、み法にもとづくま

キリスト教平和協會、日本イスラム協會等、總計十二會、三社という多彩である。

その目的は上に述べた二つであるが、具體的には第三次世界戦争防止、宗教による戦争放棄の確立、戦歿者追悼と遺族の上への思念等である。

本年五月、本會開催が決定されてから、各方面よりの反響多く、従つて本日の参列も非常に多面にわたり、連合軍司令部民間情報部外國新聞記者、日本政界、宗教界、文化團體の各代表等、特別來賓席は定刻十時には既に空席ないまでになつた。

スタンドには青山學院、國學院、鶴見女子千代田女子等の各學校が一般參加者を區切つて南、北、二面を埋めつくしている。

午前十時、いよいよ開會。

神社、佛教、キリスト教、教派神道、イスラム教團各聖職者代表の入場によつて式は始まつた。

神社神道は白の装束、教派神道は黒紋付、佛教は紫衣に緋袈裟、キリスト教、イスラム教はそれぞれの黒の正服に、それが各二十數名、威儀を正して靜々と四方の入口よりフィールドの中央、地球儀を前に放射狀に並ぶ。各列の代表は全員起立の内に更に前進、地球

ことの生活であります。

しかし静かに自分の生活を省みたととき果してほんとうに生きているでしょうか。愚惑のわれであり、あやまり多き生活に氣づかざるをえません、所詮自分の力では眞に生きえられないことに氣づかせられます、眞實のみ佛に生かされ導かれてこそ、いつ死んでもよくいつまで生きてもよいとのほんとうの生き方もできるのであります、自分のすべてをなげだして全くみ佛にまかせきつて生かされて生きる生活こそ眞に生きることができるといえます。まことに念佛こそ生死超脱の唯一の道と信ぜられるのであります。

(四)

東北を巡つた或る時、某氏に「御子息さんは御健在ですか」とたづねますと、その方の兩眼は忽ち淨い光るものがわきでてまいりました。御子息は昨年暮に病で亡くなられたという事で、その時の消息をくわしく語られました。また或るところで、戦死された令息のことを語られるお母さんは、話される度毎に、淨き涙がはふりおつるのでした。子を亡くした親の心の深き悲しみがお察しされるのであります。

阿彌陀佛の淨土は親心の世界だと聞いてをります。われわれ一切の人類は氣づくと思つたかざるとにかかはらず、大慈悲にまします大み親から「子よ！よくなれかし」と常に念ぜられているものなることを、人の親の心から推しはかれるのであります。否、如來の大慈悲ありてこそ、人の親の心にも慈悲に似たる愛の心も湧き起るのであります。われわれは如來大慈悲の大海の中に浮びをるものであり、念ぜられて念じ、生かされて生きるものであることを、念佛を申しつつ、しみじみ味はされるのであります。

儀の周圍にしつらえられた花筒に、神道關係は、他は色鮮かな花束を捧げる。ニユースカメラのフラッシュとライトが、この瞬間をとらえて凡ゆる角度から光茫を引く。カメラの回轉音のみが低く唸る間、二萬の參會者ひとしく頭をたれて、南溟の海に、大陸の空に熱風の荒野に玉と散つた幽魂に對して萬斛の想いをかける。人々の心には、父の、兄の、夫の、子供の、それぞれの亡き人々の面影がありありと浮び出でたことであらう。

默禱につづいて、安藤委員長の平和宣言。吉田首相、高瀬文相のメッセーヂ、最後に世界各宗教者よりのメッセーヂの朗讀がある。次に、大會記念事業計畫として平和塔の建立、宗教平和會館の建設計畫の發表があり、かくて第一部は午前十時四十分、終了。

十二月號豫告

隨	想	吉田絃二郎
法然上人法語		眞野正順
父と私の佛教		ブリンクリー
死生わづらいなし		佐藤賢順
冬の美容		里見君子

心　　を　　見　　る　　佛　　畫

雄　密　藤　佐

(一)

近頃再版された古寺巡禮を一本買求めて讀んだ。二十年程前に一度讀んだのであつたが、今度讀み直して見ると亦た新たな感想が湧いて來た。此の本の著者は法華經寺の阿彌陀三尊の畫に向て次の様な感想を述て居る。

「もしわれわれの心に阿彌陀淨土への願望が生きて居たらこの畫の色と形がわれわれに印象するところはもつと強く烈しいに相違ない。偉大な藝術はいかなる國のいかなる人の心をも捕ふべき筈であるが、しかし小兒が名畫に對して強い感動を持たなかつたからと言つてそれを憐む人はない。その如くに佛徒の心情について未だ小兒であるものが、佛徒の心情と離すことの出来ない此畫に對して感動

を持ち得ないとしても不思議はない。漠然とでもあるが、なほこれ以上の感動の餘地のあることを感ずる。」

著者の此の感想は、藝術鑑賞家達の宗教藝術を藝術として見る立場を最もよく詮はし、同時に宗教者の宗教藝術に對する立場との違ひを強く反省せしめるものと考へる。本書の著者は亦、先頃失はれた法隆寺金堂の「阿彌陀淨土」の壁畫の前では、次の様に物語つて居られる。

「藝術が一時的解脱に導くことはかつて力強く説かれたが、此畫の如きは藝術のこの特性を生かしてそれを永遠の解脱に結びつけやうとするものである。さうしてこのもくろみを——畫面に於て淨土の光景を物語ることではなくしてただ永遠のいのちを暗示する意味深い形を創造するにあることを、此の畫の作者は心得ていたらしい。宗教畫としてこの畫の偉大な所以も恐らくそこにあるであらう。」

私は上の二つの文章を讀んで、此著者に此の様に物語らしめた二つの作品の藝術的な價值の相違を判然と知らされた様であり、同時に、著者のいはゆる佛徒の心情で、此れを見るものの立場を反省せしめられたのである。

(二)

私共は淨土を願望するものであつて、阿彌陀佛や淨土の畫を平靜に見ず、自分の心情を無反省に畫面に與へて、此の心情を物語るも

のとして見る様である。若し、作品が、自分の心情を否定する場合
は藝術的價值を見ることなく憎惡する。淨土教徒に取つて、淨土藝
術は、自己の心情を肯定し、自己の心情を、自己の氣付かぬ所迄、
肯定し説明して呉れる時に最高のものとなる。

淨土は私共の永遠のふるさとである。世路のかんなんを終えてた
どりつかうとする本土である。阿彌陀佛は、その淨土の魂ひで、永
遠の慈父である。私共の先達は、淨土での父子相迎の爲めに、此世
路を人として誤りなく歩まうと心懸けたし、私共もそうして居る筈
である。だから、阿彌陀佛の像に對するのは、歩みつづけて居る世
路の行先にまつて居る父の寫眞を見て、やがて来る相會の感激を思
ひ及んで現在を勇氣つけることであるし、淨土の圖を拜する時は、
永遠に落着く本土の圖面に對するのであつて、私共を待ちつづける
阿彌陀佛の室や、自己の肉親先達のつどう處を物語つて呉る喜びに
ひたることである。

淨土の圖に對する時に、誰れでも第一に見るのは、阿彌陀佛の座
所である。其處は現にかんなんして居る世路を歩き終えて行きつい
た時に、釋尊が弟子をねぎらつたと同じやうに、「よく歸り來た。つ
つがなかつたか」と言ふ對望の阿彌陀佛の親言を此耳にきく所であ
る。現世では思ひ及ばぬ幸福感の中から、自分は何んと答へるであ
らうか。何んと言う高價な當惑であらう。淨土教徒に取つて此の様
なことを考へさせる時が、淨土藝術が與える一時的解脫で、同時に

現世を精進する勇氣の泉となるのである。

金堂の壁畫の淨土の圖には寶樓も寶座もなく、三尊が大きく描か
れて居るのだが、あの阿彌陀佛の、人を抱き取るにふさはしい跌坐
の、寛々とした膝間こそ、自分の肉體で阿彌陀佛の慈しみの體温を
感覺するところである。兩脇の觀音勢至の姿を見れば、私共が、佛
の膝上に登つた時の、父子相迎の觀音の場面に、雜音を入れない様
に護待して居るとのみ考えられるのである。此の様な心情を先立て
畫面に對する淨土教徒が、畫面を凝視している間に見れば見る程、
此の心情を實證する様に敘述して呉れる畫面の創形であれば名畫で
此の心情を否定するものが畫面に感ぜられた時には、不満となり無
價值と言うよりは憎惡となるのである。

淨土教徒は、「阿彌陀淨土」と言う畫題を捉えた時に、先づ「我が
求めたどりつく慈父」心情を畫面に投入れる。そして、投げ入れた
心情を畫面の構造で肯定し、説明し、歡喜しやうとするので、その
時に、畫の創形を吟味することになるのであるが、その時も、鑑賞
的とは言へず、自己の心情の敘述に肯定的であるか否かが、價值を
定めることになる。

(三)

淨土教徒が淨土藝術に對する態度は、異郷から故郷へ歸る旅路に
あるものが、故郷で自分を待つ父母の寫眞を見たり夢みたりする時

の感情と同じである。寫眞の出来不出来や似て居る似て居ないが先立たない。自分の描く父母の心情と父母の笑顔が其の寫眞に與えられ、動かない寫眞に動き情感する父母が浮び上る。そして、此の自分の心情の描いた父母を、その心情に基づいて、説明し敘述して感激を新たに確めやうとする時に、寫眞を見直すが、其の時に、溫い心の母の目が強く寫されて居る時に、此れは違つて居るとする。父の愛用するパイプが、いつも自分と話す時に持つ様な形で寫眞に出て居れば、實感を伴うよい寫眞として、見ても見ても見あきないものである。

阿彌陀佛の像は、自分の生活や心の移り變りを超へて、いつ拜しても、我が生活を見守つて下さるとする心情を實證する様に出来て居なくてはならない。自分達が食事をしたり横臥して居る間も立ちつくして見守つて下さると思う感激を滿して呉れるものでなくてはならない。感謝の眼で、佛の目を見、手を見た時に、其れを打消されては困る。佛前に居ても、人は妻子の爲めに、遊心の爲に心を動かすが、はつと氣付いて見上げた時に、相變らざる慈顔から、ゆるしとはげみの愛語が、もれて來て新たな感激を呼ぶことを妨げる様なものであつてはならない。

宗教藝術とは、本來この様な特殊な宗教的心情に立つて、此れを創形したものと考へる。だから藝術の爲めの藝術と異なるのではなからうか。少なくとも、創作の動機に特種性があると思へる。淨土教

徒の見る淨土藝術とは、淨土をなつかしむ感激を引起し、更に其れを新たに説明敘述して呉れるもの、そしてその新たに説明し敘述して呉れる時に、敘述を求め促す感情を満足させるか、きづつけるかに、其處に價值の相違を見るのであると思う。一般に藝術とは、そのやうなものと言へる様だが、又此れは特種の様にも見える。「キリスト教藝術と佛教徒」と言うやうなことを考へると特に明らかだと思ふが、藝術の價值とは元來客觀的なものか、主觀的なものか、實は私には未だ明かではないのである。

◇J・プリングリー氏 大正大學講師、僧籍をもたれ、つとに國際的佛教人として著名な方。同氏の文中に見えるお父上のF・プリングリー氏は英國陸軍士官として慶應三年來朝以來、海軍砲術學教頭、工部大學教授更に明治十四年にはジャパン・メール紙の經營者・主筆となり、爾後三十年に亘つて日本の良き紹介者として盡力され、治外法權の撤廢・條約改正・日英同盟など近代日本の成育に氏の力が多く添えられて來た。大正六年、東京で歿せられた。

◇眞野正順氏 本誌を通じまたラヂオその他で皆様におなじみの先生は今度、大正大學々長に教授會全員一致によつて推され、教學界にますます先生の御健闘が明るく待望されています。

温いでぜう(實話)

合田 微雪

署長さま、私は八つと五つの子供をもつ母親です。夫は戦死いたしました。いま私共母子は伯父の家の小屋のようなところに厄介になつています。それは書くことも口でも話されぬ貧乏生活をしています。子供のね姿をみるとつい涙が出てきます。外に出てはたき少しでも、お金を手に入れたと思つても、伯父は出してくれません。農家なので忙しいとき私はとても役に立つのです。

近所の方は民生委員にたのんで生活費を出してもらつたらと言われますが、本家があるのにそんなことをされたら困る。どこか知らない所へ行つてくれと言われます。

丁度去年の十二月二十日でした。正月は来る。本家には私の子供と同じ頃のがいますが新しい服を買つてもらつたりして、私は二人の子供のぼろ／＼のきものを見ると毎日頭の

中はかなしく世の中が腹が立つて毎晩ねて考へたのです。私にはわるい考えがおきて來たのです。

思ひきつて大切に／＼によその洗濯ものをしてたりして貰つた金を出して三田尻までの切符を買ひました。

署長さま、許して下さい。わたしは待合室で人の忘れた荷物をもらつて行かうと思つたのです。何時間いても忘れてゆくような人は今頃おりません。わたくしの頭の中には、本家の人たち、可愛い子供、警察の人、など入亂れております。四時頃でした。自動車乗場のベンチにかけていますと、隣へビロードのコートを着た奥さんが腰をかけられました。マスクをして居られるので顔ははつきり見えませんが大變上品でゆう／＼くそうに見えました。大きな手提袋の中を横目で見た私はアツと思ひました。雑誌や本と一緒によく見ると横封筒の上に謝禮とかいたものが見えます。私は何も考へませんでした。胸の鼓動が止りません。

丁度知り合いらしい女の人が走つて來て、先生々と呼んで何か渡されて行きました。その時、私は夢中で、その状袋をふところに入れたと思つたら、その奥さんは後を向かれ

ました。私は手も足も身體もがた／＼ふるえてどうすることも出来ませんでした。

あなたは随分困つていらつしやるのでせうね。決してわるい様にはいたしませんから、詳しくお家の事情を話してごらん下さい。

と、言われたときは丁度、置長様、警察の人に手をしばられたような氣がしました。その奥さんの顔を見ることが出来ません。じつと下を向いてだまつていました。その奥さんは「失禮ですがあなたは初めてなのでせう。よくよくのことがあるのでせうね。私は二人の子供をもつて居ります」と申された時、私は奥さんの目と目があひました。その時は恐ろしくありませんでした。私は涙が一杯出てきました。

奥さんは御主人が終戦まぎわの七月に爆弾で大けがをされ、二人のお子さんがありますが、田の方も少しばかりなので暇を利用して、編物や裁縫などを初歩の人に教へておられ、先の状袋のお金もその講習でお禮に貰われたのですと話されました。「そのお金は何をしようとも思つてはおりません、あなたにあげます。から二度とあんな事をなさらないで下さい。どんなに困つても、他人のものに手を出すと一生がいその苦しみのがきませんよ。私

は誰にも話しません。詳しく事情を話して下さいね」と親が子にさとすように申されて、その状態の中のをあげると申されしました。人がいなかつたら大膽で泣きたい氣がしました。私は初めに書いたより尙詳しくお話をしました。一人子に生れ貧乏ながらも父が生きてゐる時、女學校三年までいつたことも、間もなく母も死に會社の女工になつて戦死した主人と一緒にたつたことなどみな話しました。人目が多いからと、奥さんは私をつれて驛近くの映畫館に入りました。

こゝなら安心ですよ、氣をおちつけなさいね。今頃は子供さんも待つてゐるでせう。わたし一寸便所へ行つて來ますからこゝで待つていて下さい。と申されました。

暫らくして戻つて來られると一枚のはでな長襦袢を私の手に渡されました。

まだあたゝかいでせう。今脱いできたので。子供さんに何か羽織か長着にしてあげて下さい。と申されました。私は涙がその着物の上にぼた／＼おちてと／＼泣き出しました。「こゝをだまさせう。私も二人の子供と主人が待つて居ります。こうして外出すると、子供は歸りを楽しみに待つています。あなたも二人の子供さんにおみやげを持つて歸つてあ

げて下さい。一日中い／＼聞いた話、見た話をしながらみんなで頂くのは楽しいものです。

と驛通りの店でお菓子を買つて私に下さいました。私は奥様の言われる通りに頂きました。二度と死ぬような悲しい苦しいことがあつても悪い氣は起さない考へです。それが奥さまへの恩返しと思ひました。涙で大通りも誰の顔も見えません。奥さまのお所やお名前を何度も／＼うかがつてもおつしやつても下さいません。そんなことは尋ねなくても、早く歸つて子供さんを喜ばせてあげなさいね。そして思ひ切つて本家の人に頼んで、外で働いて、その半分でも本家に出してごらん下さい。しつかりしてね、約束を守つてね。

と申されてバスに乗られました。何度たのんでも名前も所も聞くことができませんでした。わたしはどんな心で家へ歸つたでせう。私はその夜みな詳しく伯父夫婦に話しました。それは／＼生神様だ。お前の運がよかつた。警察へ出されても仕方がなかつたのに、マアおれの名が出んでよかつた。見知らぬ奥様がそんなにしてのことだからの……。心あたりの所へ頼んでやろう。そして月給の半分を出せ子供も留守の間見てやるから、と今迄

に一度もなく、常日頃の私の望みをきいてくれました。四五日たつて會社の臨時やとひの掃除婦に雇はれ、今では本當の女工なみになりました。生れ變つたように私は元氣が出、希望も出て働いています。あのやさしい奥さまの姿を忘れることは夢にもありません。

署長さま、私たち母子三人はあの奥さまの力で助けてもらひ更生したのです。そして本家の者までよい人間にさせて下さつたのです。署長さま、行つて詳しくお話して何とか探す方法のお力をかりたいと思ひますが勤めがあつて思ふように行きません。私は悪い心は起しません。この間のことは許して下さいませ、そして奥さまの住所と名前を早く探すのを楽しみにして居ります。私はどんなつらい事でも悲しいことでも一つも苦しくはありません。奥さまのあの上品なやさしい願を思ひ出すと胸がスーとしてきます。

私は何とかして奥さまにお禮を言つて喜んで頂きたいと思ひます。

これは山口縣の某警察署長に宛てた手紙の要旨です。この美しい夫人を私はよく存じています。深く考えさせられる社會の數々の問題がこゝにはあると思ひます。

襟を美しく

早見君子



爽やかな健康の秋から初冬にかけて和服の美しい時でございます、殊に十月一日は單衣から袷にうつる衣替の時でもあり、十一月は亦袷から口綿にうつり霜月十五日の七五三の祝日もあつて楽しい月です、この様な季節にこそ和服美に重要な使命を握る半襟について心づくままをお話しようと思ひます。

半襟の色を生かす(無地襟)

半襟の色には、白、黒、赤、青、黄、紫、浅黄、藍、などの系統の色数があります、この色を濃くし淡くして感じをかえたものでありまして、色の系統としてはさほど多いものではありません、その色のうちで一ばん顔を美しくし健康美を増し氣品を保つものは老いも若きも淡色でありましょう。

凡そ服裝の感じから来る健康美に色があらうならば一言にして『白色』と云い得ましよう、赤も亦或は健康色でありましようが

これは複雑な説明を要します、白は説明を要さない、清純、清楚、莊重、強く正しく太陽の光線を受けいれ不潔を拒む權威をさえ感じられます、であればこそすべての式服の襟は白と決定してをります。服裝の調和と美醜の決定權を握る重要なものは半襟の色だと前にも申しました、また襟卷などのない時季の服裝は更に半襟の使命を鮮明に表はします、着物の質と色とがどんな物であらうとも絶対に間違ひのない健全な半襟の色は白に近い淡色でありましよう、顔の色が白くとも黒くともそれに拘泥する必要はありません、只黒い人は襟を細くのぞかせる心得だけで充分です、すべて襟は出し過ぎない事が厭味もなく輕快な明るさと聰明な感じを發揮します。

紫やおななど系統の濃厚な色を好んで使う人もありますが、どなたにも似合ふものではありません。人と場合によつてはひどく下品なものにさへ見えます、要するに淡色物が無なんでございます。

ふとつた人・やせた人

ふとつた人に首が短かいという人をよく見うけます、こんな人にかぎつてたつぷりと半襟を見せていますがこれは胸を大きく見せます、半襟をV型にして細長く出しますと、のどの部分が長く見えますので救はれます。

やせて細長い首の人はともすれば不健康に見える場合があります、深く丸みを持たせるように合せて、やや多く半襟を見せますと胸もふつくらして豊かな感じをあたえます。

似合ふ色・似合はない色

どんな人にも自分の色といふものがあります、似合ふ色といふのがそれです、半襟の色は殊にむづかしい、それは最も顔に接近していかも和服のポイントであるからです、上品も下品も意氣も色つばさもここから起ります。

色としてはどんなに魅力のある美しい色でも似合はない色はその人にとつては最も悪い色なのです、見た眼に美しい色や明る過ぎる色にまどわされてはなりません、ですから常によく似合う『自分の色』というものを研究して置く事が最も自己に忠實なのです。

天高く馬肥ゆる健康の秋、菊花咲きみだれる初冬、一年を通じてもつとも婦人の美しく見える季節です、着物は新調しませんでも手入れさへよろしければ一本の半襟によつて感じを新しくする事が出来ます、淡色は垢が目立ちます充分氣をつけましょう肌着じゆばんの襟は八分位が結構です、よく赤い襟をのぞかせている人を見かけますが、いろけがあり過ぎていけません、二十歳前後の色の白い人にだけ似合います、若い人はごく淡いとき色、中年以上の人は白がいやみがなくて清らかです。とも角もすがすがしい季候です、清らかに美しく半襟をたのしみましょう。

山 寺

鳥居 良禪

秋の陽が

やわらかに山門と杉にあたつた
その向うに

禪房は一面の龍膽の花をめぐら
し

露の中から

ときに凜然と落葉を匂はせた

落 日

谷間の寺は

溪流の響の中に蒼茫と傾いてい
た

た

夕暮れ

落葉よりも軽くトンボが漂ひ

秋の陽が

まばらな楓林の中に落ちて行つ
た

孔雀の話

素人

私がまだ五つ六つの子供の時の話である。

よく母親の手に引かれて上野の動物園に行つたものである。その頃は印度から來た孔雀が動物園にゐた。うろ覚えに覚えてゐる處によれば間口三間ほどもある大きな檻の中を、孔雀は長い尾を引きながら悠然として歩いてゐる。左足を前に運び右足を先に出す度毎にその太くて長い尾は上へ下へと動く。おりの前は大勢の人だかりである。口々に「早く羽をひろげないかなあ」と言つてゐる。しかし世の中に人の言葉の通じる孔雀なんてゐるものではない。依然として孔雀はおりの中を左りに右に歩くばかりである。すると或る人が、「孔雀といふものは一日の中にたつた一度正午に羽をひろげるだけなんだ」と言つた。これを聞いて、まわりの人達は大笑に笑ひ出した。時計をみると正午は間近い。やがて遠くの方で正午を知らせる砲聲が鳴

つて上野の山に、こだました。併し孔雀は羽をひろげやうともしない。やがてさしもの大勢の人だかりも少しづつ減つて行つた。そして遂に私一人となつてしまつた。私は小供だから檻の一番前にゐたのである。私は寂しくなつた。足をおりの横さんにかけて手で檻につかまつて後の方にひつくりかへつてみた。すると孔雀と向ひ側の鶴がみえた。これはおもしろい、ちようと鶴はどちやうを呑み込むところでもしかかもその影像が目の中に逆さになつて寫る。次に普通の姿勢になつて横側の山羊の方をみた。それから再び孔雀の方を見て私はハツとした。今迄地を引いてゐた孔雀の尾が眞直に立つてゐる。かと思ふと中央から少しづつ羽がひろがり始めた。速度はだんだんと速くなつて來て、みるみる内に孔雀の羽はすつかり開いた。その様は全く人間が扇子を開くのと同様である。私は氣を呑まれたやう

になつてこれを眺めた。羽の色彩も美しいが更に驚いたのはその大いさである。今迄大きいと思はれてゐた檻もつかへさうなのである。私に正面を向いて、足はそろへて靜止不動の構え「どうです 坊ちゃん 十分に見て下さい」と言はんばかりである。一分二分三分、羽一筋一筋の先端についてゐる黒い斑點は明るい春の日さしを受けて豹の目のやうに光り、かげらう（陽炎）が焰え立つてゐる。やがて羽は靜かに閉ぢ始めた。その時最前檻の前から立ち去つた人達が大聲を揚げて驅けて來た。「やあ孔雀が羽をひろげた」と叫びながら。しかしその人達がおりの處に來た時には已に全く閉ぢてゐた。前のやうに孔雀はに悠然と羽を地に引きながら歩いてゐた。

私が孔雀の羽を廣げるのを見たのはほんの偶然に過ぎない。之を佛教では機といふ。人間何によらず機に接するといふ事は中々難かしい。機に接するには勉強も大切だがそれと共に辛棒も肝要である。そこで機を待つといふ事は更に困難だといふ事になる。今日日本は非常な困難に遭遇して多くの人がいらだつてゐる。私はこの人達にまことに無理な事かも知れないが氣永に機の來るのを待てと言ひ度い。日本人はいつもせつかちの爲に失敗を

くりかへしてゐる。

日本には動物の名畫は非常に多いが孔雀を畫いたものは稀である。これは勿論孔雀が日本産でないので接する機會が無かつた爲である。辛うじて圓山應舉に孔雀の小さなスケッチがある。これは大阪に南蠻渡りの種々な動物が來たと聞いて應舉が筆と紙を持つて駆けつけて寫生したものである。羽はひろげてゐない。近頃では小林古徑さんに孔雀の名畫がある。二枚折の金屏風にやゝ右手に寄せて羽を擴げてゐる處を極彩色でものしたものである。羽は畫面一ぱいに擴がり僅かに左方に餘地を作つてゐるのに、私がみた時のやうに羽を擴げた時の大きな感じを表現しやうとしたのではないかと思ふ。もし古徑さんが動物園で寫生なさつたとしたら、私と同じ様にさぞ長い時間孔雀の羽をひろげるのを待つたに相違ない。ずっと古い處では南宋の張思恭筆と傳へる孔雀明王の圖が京都の仁和寺にある。佛畫としても頗る大きな方で幅一間餘りと思はれる程の掛物である。孔雀は一ぱいに羽をひろげて先は畫面に餘つてゐる。その背の上に明王は坐し給ふ。繪の具は剝落したかと思はれるほど白ちやけてゐるが、絶対に寫生でなければ畫けないと思はれるほど綿密な繪で

ある。南蠻から宋朝の天子に献上したものを寫生したのでもあらうか。更に古く遡れば正倉院御物の中に孔雀を主體として百合其他を配した刺繡の幡がある。これを見た者は誰しも其處に盛り上げられた感覺の近代的なのに驚嘆するであらう。思へば日本に於いて（西洋でもさうだが）寺院の文化に貢獻した處は實に大きい。國寶の大部分は寺院に寶藏されてゐるのである。これ等は西洋美術より遙かに秀れてゐるものであり、實をいへば今日の日本人の多くに理解困難な程度の藝術なのである。私はこれ等を保存して來た寺院に深い感謝の意を表すると共にこれ等無上の美術品を後世に傳ふるべき我等の責務の大なるを痛感するものである。

◆お十夜の話、賣切れ

淨土トラクトとして出刊された「お十夜の話」は幸に各地方から好評により賣切れてしまひました。増刷したのですが紙型をとらぬため遂に申込に應じ切れず、裏面廣告の訂正も間に合はず、こゝに急ぎお断りします。今後の御後援を願ひます。

秋 思

—古き手帳より—

窓下をさわいで通る子供らのゆくての
空に燃える夕映え

幼なくて故里の野にうたひてし夕焼の
唄はいまも忘れず

どこやらで子供が泣けるその聲をただ
ぼんやりと聞きてゐしかな

秋風は破れ障子をふきぬけてかすかに
音をたてゝゆきけり

想ひつかれつかれしまゝに寢ころべば
心さびしく夜の時計鳴る

ふちた・ひろし

法 然 上 人 法 語 (二)

眞 野 正 順

たとへば、葦のしげき池に、十五夜の月の宿りたるは、よそこには月宿りたりと見えねども、よく／＼立ち寄り見れば、葦間を分けて宿るなる。妄念の葦は茂けれども、三心の月はやどるなり。

よく夕方など、薄暗い野道を歩いて來ると、道端の窪地

に、少しばかりの水が溜つて、茅や葦などが生へている處がある。ふと氣がつかますと、その生い茂る葦の間に、きらりと光るものがあるので、立ち止つて見ると、そのわずかな水に、思ひもかけず、いつ出たのか、美しい月影が映つて、靜かに輝いている。思はず足を留めて、じつと見ますと、この誰れ知る者もない小さな水の面は、冷く銀のやうに輝き、煌々と澄む月の光に満ち、その中に、大空の莊麗な世界は、のこす所なく藏められているのです。

かういふ事は、誰れもが、何處かで経験した事のある小

さな風光であります。その淋しい美しさは、何か知らず人の心を引きつけて離さぬものがあります。

あの越後國上山の良寛上人もまた、この葦の間の月影に心引かれた一人のやうです。その歌集の中にかういふ一首があります。

「うき草の生ふる渚に月かげのありとは

こゝに誰れか知るらむ。」

この淋しい月影が、人の心を捕へて離さないのは、それがどこか、人の姿に似ているからでしやう。

深い道德をつゝんで、知る人もなく、ひそかに國上山の

奥に世を送る良寛上人の姿も、どこか、これに似ています。

法然上人は、この譬えを殊に好まれて、御法語の中に繰返し用ひられたと、弟子の乗願上人が語っております。上人もまた、この葦の間の月影に、しみじみ心を打たれたに相違ありません。そして、佛に對する人の心も、また、之れに似ておると説かれたのが、今日の法語であります。

晝間はすがれた葦の葉に埋もれ、見るかげもない道端の水も、夕べとなれば、おのずからそこに、清らかな月影を宿している事が現はれてくるやうに、人の心もまたそうであります。外の姿によつて、その内面の光を計ることは出来ません。

少しさき頃の映畫に「無法松の一生」といふのがありました。無法と云はれる程の、荒くれた粗暴さの裏に、優しい純情をひそめ、それを現す時もなく、たゞその爲に身を苦しめ、身を亡ぼしてゆくのでありますが、人はいつも、かう云ふ姿を見るのが好きです。それは、何かなし、自分自らの奥に秘められたものゝ運命に似ているからです。

この社會の中には、随分いかゞわしい生活を營んでいる者の群がある。そこでは社會道德は顧みられず、法律さへ

もしば／＼犯される。教養ある平穩な人々の眼から見ればなにか荒々しい獸の群のやうに映るかも知れぬのでありますが、親しくその社會の内側に入つて見れば、その荒々しい風體の裏に、意外にも溫い人情が流れ、却て、教養ある社會には見られない素朴な信頼と安心とを以て、互に堅く結びついているのを見出すのです。

葦間にうつる美しい月影を見つめていれば、そこに立つ黒く亂れた葦の姿は、いつか消えて、たゞ煌々たる光の世界のみとなるやうに、人はその内面の美しい光を互に見入るときに、その醜い姿も行動も、おのずから消去つてゆく。

實を云へば、人はその容貌の美醜が、のがれ得ぬ其人の運命であつた如く、その職業の賤しさ、或は性格の歪みまでも、多くは、かう成るより外なかつた運命の重荷であります。

その背に負つた運命の荷の下から、互に手を伸べあつてひしと握りしめている。それが人生であります。互の内なる月影を互に見入り見合ふことに依て、眞の社會は結合されるのであります。

人と人とを結びつけ、この社會や家庭などを形づくる土

臺は何であるか、學者は色々と數へ上げています。道德、法律、習慣、經濟等々、かう云ふものが重要な因子をなしている事は疑ふ餘地ありませんが、それが最後の基礎ではない。その事を何よりも露骨に示したものは、この大戦から戦後にかけて展開された我が社會上下の混亂であります。それは從來倚りかゝつていた處の習慣と道德とか、財や地位をなくなし、依り所はなくなつて、まだ新しき秩序にも馴染むことができません。子は親に、妻は夫に、人は人に背いて、思はざる混亂を捲起したのは、記憶に新たな所がありますが、この様な間にあつても、互に相信すること堅い所に於ては、何等混亂は起らず、靜かに新たな社會秩序へと應和し推移致して行つたのであります。あらゆる轉變に堪えて人を眞に結ぶものは、その内面の光を互に信する事である。社會のあらゆる機構は其上に築かれて初めて意味があるのであります。

人の心の奥底をさぐり來れば、必ずそこに氣高い光が輝いておる。この事を、人は自分自身に於ては容易く領づくのでありますが、他人を見る眼においては、屢これを躊躇ためらふのであります。然しこれを互に見、かつ信することに依て、人と人とは互に結合するのであります。人を見る眞の

眼は、その外形によつて裁くところの智慧ではない。見えざるを見るところの「信」でなければならぬ。眞實の生活の基礎は「信」であります。

宗教はまた、かゝる光の中に生きんとするものであります、この光の中に身を投げ入れ、この光によつて、この光の中に生きてゆく事であります。

葦の間の月影も、つきつめて行けば、やがて天上の月に歸らねばならぬやうに、人の心の輝きも、推し極めてゆけば、やがて佛に到達せざるを得ない。佛は一方から云へば人の天眞の光を極度にまで極めたものに外ならず、他方から云へば、人の心の輝きの流れ出る本源である。

光を求むる者は、やがてその光源に向ひ行かねばならぬやうに、心は常にその源に結びつかねばなりません。佛を念ずるとは、この光源へと結びつく心であります。

上人の有名な歌に

月影のいたらぬ里は無けれども

眺むる人の心にぞすむ

とあります。

月影は、いたるところ、野を越え山を越えて隅もなく輝いておる。然し仰いで、この光の眞の美しさを認め、はか

り知れぬその深さを知る者は人のすべてでない。

そのやうに、佛の性質は、常に到る所、あらゆる人々において具つておる。然し眞にそれに目覺めない限り、尊い佛の光も、たゞ人間性の一端に觸れて、時たま、小さな閃めきを示すに過ぎない。

それならば、眞に佛に通いゆく道は何であるか。今日の法語に、

「たとへば、葦の茂き池に、十五夜の月の宿りたるは、よそには月宿りたりと見えねど、よくよく立寄り見れば、葦間をわけて宿るなる。妄念の葦は繁けれど、三心の月は宿るなり。」

とあります。天上の月は常に照して止まぬのでありますが、我等の雜念はこれを蔽ふておる。かゝる雜念の葦を分けて漏れて来る月影は、三つの心であると上人は教へられました。

一つには至誠心、まことの心。二つには深心、深く眞實を求める心。三には回向發願心、佛に向いゆく心。おしなべて言へば「眞に佛に向いゆく眞心」であります。この三心こそ、佛と人とを結ぶ場所であります。葦の間の水は、乏しいけれど、光をうつす素直なる平らかなる心の姿であ

りますから、天上より來つて、こゝに高い月の姿をとどめる輝きそのものともなるのであります。

信仰は人に示す爲めのものではない。人目を避けて誠の心を傾け、ひたすら佛を念する時には、たとひ妄念の葦は繁くとも、天上の月影は秘かにかつ確實におとづれて来る。三つの心は實に佛に結ぶ念佛の基礎である。これなくて念佛は眞とならない。

また、かゝる三つの心は、念佛によつてこそ引き出される。念佛の聲と共に、この心は自らわきおこつて来るのであります。この様に、三心と念佛と、互に相支える事によつて、澄んだ満月の光は、自から、わが裡に満ち溢れてくるのであります。

上人はまたこの法語の初めに、
「人目を飾らずして、往生の業を相續すれば、自然に三心は具足するなり」と言はれています。

天上の月から見れば、こゝにある我々は、すべて其光を映すところの渚なみだであります。人はその境遇と運命の様々なる姿の中に、その受けた光を輝かせてゆく。この世は畢竟人間それ／＼が互に分ち與へられた清き光を基として、様

々の生活相を織りなしてゆく一幅の畫でありまじやう。

唐の善導和尚は、念佛する者の生活規範を簡潔に云ひ放たれました。

「慈悲の心を以て相ひ向い。佛の眼を以て相看る」

佛の眼とは、すべてをこの月の光の中に見る事であります。互の胸に湛えられたる佛の光を互ひに見交しつゝ睦み合つてゆく生活。それが信仰者の生活であります。

内の光で見るとき、外の形は自ずから薄れてゆく。人と人と、その境遇と運命に於て、互に相異り、たとひ天地の如く相隔つておつても、その内に流れる光においては同一である。様々の立場、運命の人々が、この一つの大きいなる光の下に手を握り合ふ事によつて、眞の社會は形づくられてくるのであります。

それはやがてまた、佛の國をこゝに映すものでもありません。あの念佛が佛の光をこゝに呼ぶものであつたやうに、その生活もまた、輝く佛の國をこゝに移し築くものでなければなりません。念佛者の社會理想は、即ち、これに外ならぬのであります。

◇平和の鐘は響く

四國高松市外佛生山町の法然寺では、かねて寺内にて佛師今村久兵衛氏（大阪豊中）の手によつて謹作中の二萬の納骨一連托生の骨佛が完成したのと同時に、之また鑄造中の洪鐘（京都三和合金鑄造所作）が出来上つたので十月六日國民宗教平和大會を記念して開眼並びに撞初供養が盛大に行なわれた。

當日は四國民事部長官を初め京都からはこの梵鐘の設計者青木一郎博士等多數の名士、檀信徒が參列し午前、午後の二回に亘りこの盛典が嚴修された。

この梵鐘は百六十五貫の重量、基本音の振動數一二五サイクルで、國寶妙心寺の黃鐘調の一二九サイクルに殆ど近似し、妙音の持續は二分十秒に及ぶものである。更に正面兩池の間には藝術院會員福田平八郎畫伯が平和の使徒鳩の繪を、裏面には同會員歌人吉井勇氏の

この鐘の響かふところ大なる

和きの世の礎となれ

の歌が鑄こまれている。この日、この平和の鐘の妙音は、住職細井照道氏の挨拶の辭とともに「時の話題」として四國全域に録音放送されたが、宗教による平和への響きは人々の胸ふかく傳えられた。

◆會友の聲◆

◇近頃、戦前の知名の人たちが書かれたことが餘りにも誤謬が多いのに、つくづく嫌になつて念佛がはげまれるようになった気がします。昔の浄土誌を取り出して読みもし、時には講演材料の参考にもがなと漁つてもみますが、眞野先生の書かれたものだけが、戦後の今にも變らぬ眞理のひらめきがこもつて、戦前書かれたにも係はらず、その儘今にも通用するので、はじめて先生の眞價が顯はれているのを感じていますが、ここに氣付かれた會友何人居るでせうか。全ては歴史の大きな力を痛感させられます。(島根、旭俊正)

◇浄土宗の年中行事である十夜法要を嚴修するに當つて、何か讀物でもと念願いたしていましたが、今度浄土誌上で十夜についてパンフレットが刷行されている由拜見して誠に喜ばしく思いました。今後も適時、こうした方面に向つて啓蒙普及の企てを願います。(秋田・本覺寺)

◇浄土が新しい編集になつての進みは有難いのですが、中村先生のよつてつづけられた信仰相談が消えたことは私のような迷羊には殊の外淋しい気がします。之は私だけではないと思います。信仰相談風の欄を復活して頂きたいと思ひます。(千葉・井上純孝)

——お十夜の話はお陰で各方面から多大の好評を得ました。戦前、戦後を通じて變らぬ眞實の道をゆく「浄土」の眞價をひろく知つて頂きたいと思ひます。正信を導き、近頃の似而非宗教を一掃する上からも、相談欄の線をもつものの復活は考慮したいと思ひます。

芝園だより

◇小學二年の頃、先生が「可愛いと思うもの」を書けといつた。僕は象を可愛いとしたが、この答案は先生の氣に入らなかつた。「ただ大きいばかりじゃないか」先生はかうたしなめた後、僕の答案に×印をつけた。芥川龍之介の追憶にある話だが、先頃來、動物園の象が大騒ぎされてゐる。珍らしいものの好きの騒ぎに終らないで欲しい。

◇珍奇なもの、異様なもの、それでさえその深い所に觸れるとき汲むべき好きがある。日本を理解し日本人を知るブリンクリー氏の語られるところには、明治日本に與えられた西歐の人々の人間愛の心が感じられる。

◇初冬、また今年も先が見えてきたが、社會の先はどう見えるだろう。刻々動いて止まない世の姿、念々轉じて止まない自己の姿、どこに動かぬ心棒、不易の光があるのだろうか。法然上人法語にふか

く聞き、しづかに想ふべきものがある。

◇新年號の新企劃に、連日事務所は忙しい。御期待下さい。(藤田)

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下さい。着次第御送本申上げます。

「浄土」十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿四年十一月二十日印刷
昭和廿四年十一月一日發行

(定價貳拾圓)

編輯兼
發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所
東京都千代田區神田神保町三ノ下

發行所 法然上人鑽仰會
東京都港區芝公園五ノ一〇

振替東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓(送料共)

爽秋におくる淨土トラクト

初めて書かれたお十夜の話
読んですぐ分るお十夜の話
史實に基いてのお十夜の話

藤田寛雅著

お十夜の話

一部四圓
送料六圓

早くも希望相次ぐため、申込は至急にお願いしま
す。申込順に送本します。

初版はすでに賣切。増刷も残部僅少。

賣切絶版とします。

申込所 東京都港区芝公園五の一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

佛教現代語譯の嚆矢！

佛教が眞に現代に生きて骨肉となるには
まづそのことばが充分に消化されねばならぬ。
今回淨土教の根本經典の現代譯が服部氏多年の努力
によつて完成した。

新選擇集

(人名書名
解説附)

服部英淳譯著

B 6 判上製 總頁二三〇頁
定價一八〇圓 送料二〇圓

從來の如き單なる漢文の書流しではなく

現代文口語體を以つて譯出された。

本書を通じて元祖上人の御信念に觸れられんこと
を。

發行所 東京都豊島區西巢鴨四丁目
大正大學 淨土學研究會